

不登校の訪問臨床における子どもと訪問者の関係性

—— チャムの関わりの意義 ——

吉井 健治

(キーワード：不登校，訪問臨床，チャム，シンメトリー)

はじめに

ひきこもり傾向の不登校の子どもを対象とした「訪問臨床」は、不登校対策事業の1つとして、教育委員会と大学の連携のもとで実施されている。訪問者は、臨床心理士養成及び公認心理師養成の大学院生である。大学院生は、実習として取り組み、定期的に大学教員からスーパーヴィジョンを受け、大学内で開催される訪問臨床事例検討会(年6回開催)に参加している。訪問は、原則として週1回、60分間である。訪問回数の制限はないが、年度末で一旦終了し、年度ごとの申請となる。訪問を受ける家庭の費用は無料である。筆者は、本事業が始まった2002年度から運営協力者、訪問臨床事例検討会の講師、訪問者のスーパーヴァイザーを務めてきた。

なお、訪問臨床の定義は以下の通りである(吉井, 2013)。訪問臨床とは、臨床心理士およびこれに準ずる者である訪問者が、対象者の家庭を訪問し、対象者およびその家族に対して、一定のアセスメント(状況・状態像・要求などの把握)に基づいて、訪問の構造(時間、場所、関係性、活動内容、安全性など)を調整しながら、臨床心理学的支援を行うことである。

筆者はこうした実践を通して、不登校によって人々とのつながりを喪失した子どもが、訪問者とのチャムの関わりを通して、つながりの回復に至ったという事例を多く見てきた。そこで本論文の目的は、第1に子どもと訪問者の関係性のタイプを明確化すること、第2に事例を通して関係性のタイプの移行過程を示すこと、第3にチャムの関わりの意義を示唆することである。

1. 子どもと訪問者の関わりのタイプ

不登校の訪問臨床における子どもと訪問者の関係性の変化の過程には特徴的な流れがある。子どもと訪問者は、最初はかるい遊びをしたり簡単な勉強をしたりして親しくなり、次に子どもが好きなことや得意なことを共有して楽しむようになり、そして次第に子どもは自分の経験や考え、悩みや困っていることを話すようになる。こうした関係性は、<指導的関わり>、<遊び的関わり>、<チャムの関わり>、<相談的関わり>と呼ぶことができる。

これら4つのタイプの関わりは、タテ関係・ヨコ関係という要因と、現実的側面・内面的側面という要因の組合せから構成される(図1)。タテ関係とは、親と子、教師と生徒、カウンセラーとクライアントなどの関係であり、ヨコ関係とは、友達、仲間などの関係である。現実的側面とは日常的・社会的な側面のことであり、内面的側面とは心理的な側面のことである。以下では、これら4つのタイプについて簡潔に説明する。

<指導的関わり>

<指導的関わり>とは、タテ関係における現実的側面での関わりを行うことである。子どもは、訪問者に勉強の様子を見てもらうことにより学習への自信や動機づけを高める。また、宿題やドリルなどを訪問者と一緒に勉強することによって、子どもは勉強の仕方や勉強の習慣を身につける。進路選択の支援をしたり、ソーシャルスキルを習得させたりすることも指導的関わりである。以上のような関わりを通して、子どもの自尊心や社会性が高められるという効果がある。ただし、子どもが指導を押しつけられていると感じた場合には、訪問者との面会を拒否することがある。

<遊び的関わり>

<遊び的関わり>とは、ヨコ関係における現実的側面での関わりを行うことである。子どもは訪問者とゲームや趣味等を一緒に楽しむことにより、訪問者に安心感を抱くようになる。具体的には、コンピュータ・ゲーム、

テーブルゲーム（トランプ、将棋など）、製作（ビーズ、プラモデルなど）、スポーツ（キャッチボール、バドミントンなど）である。遊びの関わりは、子どもが好きなことや関心のあることを一緒に楽しむことであり、Sullivan (1953)の児童期の友人関係のあり方に相当する。子どもは、訪問者が家に来てくれるのを楽しみに待つようになる。子どもは、楽しみを共有する相手ができ、大きな声が出たり笑顔が見られたり、明るい気持ちになってくるといった効果がある。ただし、毎回かえる遊びが続くばかりで、子どもには何も変化が見られないので、訪問者は引きこもりを助長しているように感じたり、自分の無力感を感じることもある。

<チャムの関わり>

<チャムの関わり>とは、ヨコ関係における内面的側面での関わりを行うことである。チャムとは、年の近い同性の親しい友人のことである。子どもは訪問者に自分の考えや気持ちを話し、受容してもらったことにより、訪問者に親密感、安心感を抱くようになる。なお、チャムについては後で詳しく述べることにする。

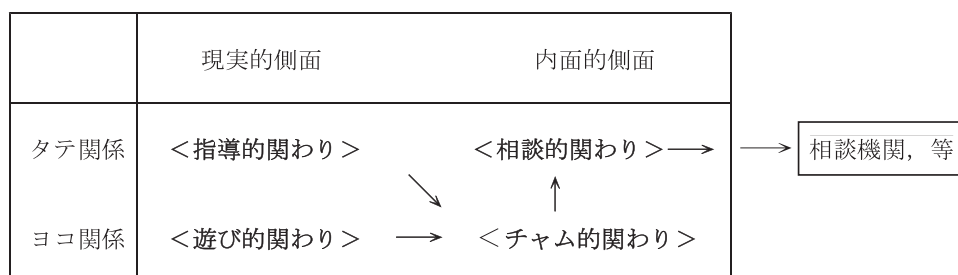
<相談的関わり>

<相談的関わり>とは、タテ関係における内面的側面での関わりを行うことである。子どもは訪問者に悩みや心の傷つきを打ち明け、優しく応じてもらったことにより、解決への希望がわき起り、今後のカウンセリングへの動機づけが高まるようになる。ただし、子どもは簡単には内面を見せてくれない。そのため訪問者は、「困ったり悩んだりしていることがあったらいつでも相談してほしい」と繰り返し声をかけておくと、子どもは相談しやすくなる。相談を受け入れる“器”を提供するということである。そうすると子どもは、学校に行きづらくなったきっかけ、親には本当の気持ちを言えないこと、自分に自信がないことなどを打ち明けてくれるようになる。そこで訪問者は、「誰にも話せないで、自分一人で抱えていてつらかったね」などと穏やかに温かく受け止めるのである。

以上、4つのタイプを提示したが、一般的には、訪問の経過によって、<指導的関わり>または<遊び的関わり>から始まり、次に<チャムの関わり>が起り、そして<相談的関わり>へと展開していく（図1）。ただし、1回の訪問において、たとえば<遊び的関わり>と<相談的関わり>の両方が見られるなど、複数のタイプが混在していることもよくある。たとえば、トランプでかるく遊んだ（<遊び的関わり>）後に、友人関係の悩みを話す（<相談的関わり>）という場合である。

こうした4タイプは、どれが優れているというよりも、子どもと訪問者の関係性によって生じた結果であり、4タイプの全てに意味があり、効果的な関わり方であると考えられる。つまり、子どもと訪問者の関係性が発展していく過程の中で、必要に応じて生じてきたものと考えられる。関わりタイプが変化するのは、訪問者が一方的にリードしているのではなく、訪問者と子どもの相互作用によるものである。その際に、訪問者が子どものニーズを捉え、子どもの状態に合わせることで、調整（アジャストメント）は大事なことである。

子どもは、<相談的関わり>を経て、訪問者の橋渡しによって外部につながっていき、スクールカウンセラーや専門機関でのカウンセリングを受けるようになったり教育支援センターに通級するようになったりする。



子どもと訪問者の関係性は、最初は<指導的関わり>または<遊び的関わり>から始まり、次に<チャムの関わり>へと進展し、そして<相談的関わり>へと展開する。その後は、相談機関等でカウンセリングを受けることにつながる。

図1 子どもと訪問者の関係性の移行過程

2. <チャムの関わり>から<相談的関わり>への移行過程

子どもは、訪問者との間で<チャムの関わり>がある程度満たされると、少しずつ自分の内面を見せてくれるようになる。誰にも話さなかったこと、一人で悩んでいたこと、学校に行きづらくなった気持ちなどを話してくれるようになる。そして、訪問者に「こんな私をどう思いますか」、「どうすればいいですか」などと尋ねてくる。子どもは、最初の頃は心を閉ざし自分の内面を見せることに抵抗があったのだが、訪問者の<チャムの関わり>を受けることによって訪問者への親しみと信頼が形成され、何でも話せる気持ちになってきたのである。

こうしたとき、子どもは訪問者に<相談的関わり>を求めているのだが、訪問者はどのように対応するのがよいのであろうか。なお、<チャムの関わり>が少なくなると<相談的関わり>が増えてきたとしても、<チャムの関わり>が皆無になることはない。なぜなら、<チャムの関わり>は関係性の基盤となるからである。

(1) <チャムの関わり>から<相談的関わり>へ移行した事例

中学生女子Aは、中学2年生の頃から学校を休むようになった。中学3年生では、週1、2回相談室登校をしていた。

第1回～第11回（7月初旬～10月下旬）の訪問では、テレビドラマや音楽の話をしたり、カードゲームをして一緒に遊んだ。この時期は<遊びの関わり>の時期に相当する。

第12回～第14回（11月）の訪問では、Aは自己開示してくれるようになった。「本に描かれていた絵が怖かった」など怖かった話をしてくれた。また、家族旅行で買った品物を見せてくれたり、父親の性格について話してくれた。

第15回～第17回（11月下旬～12月中旬）の訪問では、自分のことに関して否定的な話をしてくれた。「最近、視力が低下しました」、「食べ物で、私は…が苦手です、食感、匂い、味とかダメです」、「学校で私は…というあだ名で呼ばれていたのは嫌でした」、「身体がかたくて体育が苦手です」、「学校で教室移動をするときに遅いと叱られて嫌でした」などと話してくれた。この時期は、<チャムの関わり>の時期に相当する。

第18回～第21回（12月下旬～1月中旬）の訪問では、最初または最後にトランプをする（<遊びの関わり>）一方で、自分の悩みを話してくれるようになった。この時期訪問者は、<悩んでいることや困っていることがある>と、Aが内面を見せやすいように何度か声をかけておいた。するとAは、「私、初対面の人に緊張して目を合わせられなかつたりします。どうしたらいいのでしょうか?」、「私は自分から話しかけることができなくて、なかなか友だちができませんでした」と自分の性格について率直に表明してくれた。また、進路のことについて、「面接で頭が真っ白になったらどうしたらいいですか?」などと不安な気持ちを打ち明けてくれた。この時期は、<相談的関わり>の時期に相当する。

以上のことから、Aは、人に対して優しく配慮できる面がある一方で、繊細で気を遣い過ぎる面があった。Aは、社交不安傾向が高いので、クラスの間人間関係に疲れてしまい、登校しにくい状態になっていた。そこで、訪問者は<遊び的関わり>（第1回～第11回）、<チャムの関わり>（第15回～第17回）を通してAに親しみと安心感のある場・関係を提供した。するとAは、自分の緊張する性格や将来への不安を話してくれるようになり、<相談的関わり>（第18回～第21回）が見られるようになった。訪問者がAのありのままを受け入れ、共感してくれたことにより、Aの自己受容が促進され、楽な気持ちで人と接することができるようになっていった。

(2) <チャムの関わり>から<相談的関わり>へ移行し、そして相談機関に来談した事例

中学生女子Bは、人とのコミュニケーションがうまくとれない特性があったので、集団になじみにくかった。そして、小学生時代、いじめを受けて心が傷ついた。中学生になると、過去のいじめによるトラウマの影響から周囲の友人たちの言動に対して過敏に反応するようになり、「自分は嫌われている」と強い被害感をもつようになった。そして、「自分なんかいない方がいい」という強い自己否定感をもち、「信じられる人は誰もいない」という人間不信に陥った。こうして、人に対して心を閉ざし、家に引きこもってしまった。教師やスクールカウンセラーが家庭訪問しても会ってくれないし、親が病院や相談機関に誘っても拒絶した。

こうした中、母親が若い大学院生が家庭訪問して遊んだり話したりしてくれる制度の活用を提案したところ、Bは少し関心を示し「どちらでもいい」と答えたので、依頼することになった。しかしBは、最初の数回は部屋から出てこないで、訪問者に顔を合わせることもなく、何の返事もなく、黙ったままだった。訪問者は手紙を書いたり、Bの部屋の外から声をかけて辛抱強く関わった。するとBは、訪問者に顔を合わせられるようにな

り、趣味の話をしたりゲームをしたりするようになった。こうして、〈遊び的関わり〉を通して訪問者に安心感をもてるようになっていった。

その後、趣味の話、日常の話、小学生時代の楽しかった思い出などを話すようになり、週1回1時間の訪問者との時間を楽しみにしてくれるようになった。こうして、〈チャムの関わり〉を通して訪問者への信頼感をもてるようになっていった。Bは、訪問者との〈遊び的関わり〉、〈チャムの関わり〉という交流を通して、人への安心感と信頼感を回復することができた。

それから次第にBは、いじめられた経験や家族のことについて話をするようになっていった。訪問者は、Bの話を受容的に聴いて、あまり深く掘り下げることにはしなかった。Bは、もっと聴いてもらいたい様子で、訪問者に〈相談的関わり〉を求めるようになってきた。そこで、訪問者は保護者とBに相談室でカウンセリングを受けることを勧めた。

Bは、カウンセリングで話を聴いてもらおうと思って、勇気をふりしぼって相談室に来談した。カウンセラーは、「Bさんがここへ来られるまでにはいろいろな気持ちがあったと思います。今日はよく来てくれました。お会いすることができて良かったです」と、ねぎらいの言葉をかけた。カウンセラーは、訪問者から渡されたボタンをしっかりと引き継いで、まずは親しみと安心感のある面接を心がけた。そうするとBは、数回後の面接で、これまで誰にも話したことがなかった傷ついた気持ちを語り始めた。両親の仲がわるくて辛い思いをしたことや、両親が離婚してさみしかったことを話してくれた。こうした話は、家庭よりも相談室という場がふさわしいことから、Bは来談して話を聴いてほしかったと思われた。

(3) つながりの形成と器の提供

〈チャムの関わり〉から〈相談的関わり〉への移行過程において、重要なポイントは2点ある。一つは、子どもと訪問者の〈チャムの関わり〉を通しての“つながりの形成”である。つながりが確実に形成されることによって、子どもは訪問者に相談してくれるようになる。もう一つは、“器の提供”である。事例Aで訪問者は、悩んでいることや困っていることがあればいつでも話してほしいと、Aが内面を見せやすいように何度も声をかけておいたことがあった。子どもは、本当のことを言うのは恥ずかしい気持ち、否定されないだろうかという不安な気持ち、本当に分かってもらえるのだろうかという疑いの気持ち、などをもっているのに躊躇している。そのため、子どもが自発的に内面を見せてくれるのを待っているだけではなかなか進展しない。そこで訪問者は、悩みや困りごとを受け入れる準備があることを子どもに積極的に知らせるのである。子どもの気持ちや考えを抱えること(holding)(Winnicott,1965)の構え、覚悟があることを示すのである。

3. チャムの心理学的意味

訪問の目標は、訪問者が家庭訪問を継続することだけに止まらず、相談機関、病院、教育支援センター（適応指導教室）、学校の相談室等に子どもが通えるように手助けすることである。そのためには、子どもが訪問者を信頼して頼ってくるという〈相談的関わり〉が重要であり、その前提条件として〈チャムの関わり〉が必要である。以下では、チャムの心理学的意味についてまとめる。

(1) チャムの概念

チャム(chum)とは、Sullivan(1953)が提唱した概念であり、年の近い同性の親しい友人のことである。以下では、吉井(2003)をもとに説明する。

Sullivanは、前青春期になると大の親友といった年齢のちかい同性の特定の1人への関心がうまれるとし、この同性同年輩の親友をチャムと呼んだ。チャムは多くの要素が似ている相手である。チャム関係の成立において重要な要因は、関係の適合性(相性が合うかどうか)、関係の強度(結びつきの程度はどうか)、関係の持続性(どれくらいの期間継続するのか)である。

子どもはチャムに対して自由に表現するようになる。子どもは、児童期には独りよがりな幻想的な考えをもっていたとしても、前青春期になると相手の目を通して自分を眺めるという新たな能力をもつようになり、そうした幻想的な考えを訂正することが可能となる。

子どもは自分だけが他の人と違ってると感じて不安や自己否定の気持ちを抱くことがあるが、こうしたときチャムがいれば、率直な自己開示をして自分の気持ちや考えを友人と比較することができる。そして、自分の気

持ちや考えを確かめたり修正したりしながら、人間は似ていること、人間は分かり合えること、人間は独りぼっちではないことに気づくのである。

(2) チャム体験と学校接近感情

田中・吉井(2005)は、小学5、6年生、中学1～3年生を対象に、チャム体験及び学校接近感情に関する質問紙調査を実施した。本研究で開発されたチャム体験尺度は、1因子12項目から構成された(表1)。また、学校接近感情の測定は、「あなたは学校で楽しく過ごしていますか」、「あなたは学校へ行きたくないことがありますか」(逆転項目)の2項目で尋ねた。結果では、チャム体験得点と学校接近感情得点との相関値を求めたところ、小学生男子、小学生女子、中学生男子、中学生女子の全てのカテゴリーにおいて有意な正の相関が見られた($p < .01$)。つまり、チャム体験が多いほど学校接近感情が強いこと、逆に言えば、チャム体験が少ないほど学校接近感情が弱いことが明らかにされた。

チャム体験が少ない子どもは、学校で楽しく過ごせなかったり学校へ行きたくなかったりするという結果が示された。このことから、もともとチャムをもたない子ども、あるいはチャムとの交流が少ない子どもに対して、もっと多くのチャム体験を得られるように支援することは重要である。こうしてチャム体験を増やしていくことによって学校接近感情を強めることができる。

表1 チャム体験尺度

-
1. おたがいの悩みを、うちあける友達がいる。
 2. いっしょに悩んでくれる友達がいる。
 3. 困っていることを話し合う友達がいる。
 4. おたがいのことを、何でも話せる友達がいる。
 5. 人前でいいにくいことを、こっそり話せる友達がいる。
 6. だれにも言えない秘密を、話せる友達がいる。
 7. 異性のことを、おたがいに話せる友達がいる。
 8. いっしょに勉強したり、宿題をしたりする友達がいる。
 9. いっしょにマンガや絵をかいたり歌を歌ったりする友達がいる。
 10. 電話やメールをしあう友達がいる。
 11. 自分の家族のことを話せる友達がいる。
 12. 自分たちだけに通じる言葉を言い合う友達がいる。
-

チャム体験尺度は、田中・吉井(2005)より引用した。

4. <チャムの関わり>の本質としてのシンメトリー経験

(1) チャムの関連概念

チャムとは、Sullivan(1953)が提唱した概念であり、同性同年輩の親しい友人のことである。これと似た概念には、想像上の仲間、普遍性、分身自己対象がある。

想像上の仲間(imaginary companion)とは、Svendsen(1934)が提唱した概念であり、「目に見えない人物で、名前を付けられ、他者との会話の中で話題となり、一定期間直接に遊ばれ、子どもにとって、実在しているかのような感じがあるが、目に見える客観的な基礎を持たない」とされている。

普遍性(universality)とは、集団精神療法の治療的因子の1つである。Yalom & Vinogradov(1989)によれば、グループのメンバーは問題の分かち合いによって、他者も自分と同じような感情や問題をもつことを理解し、孤独感から免れ、安堵感をもつ、というものである。

分身自己対象(alterego selfobject)とは、Kohut(1984)が提唱した概念であり、本質的に似ていることで安心感を与えてくれる対象(人間、動物、その他)のことである。Kohut(1984)は、分身自己対象について、「沈黙の存在」、「ただ沈黙のコミュニケーションのなかで双子と共にいること」、「体験そのままの複製品ではなく、情緒的に類似の援助を提供する体験」、「外的な類似ではなく、意味の同一性や機能の類似である」、「人間のなかにいる人間であると自分自身を感じるときに、あいまいではあるが強く広範な安定感を獲得する」と述べている。

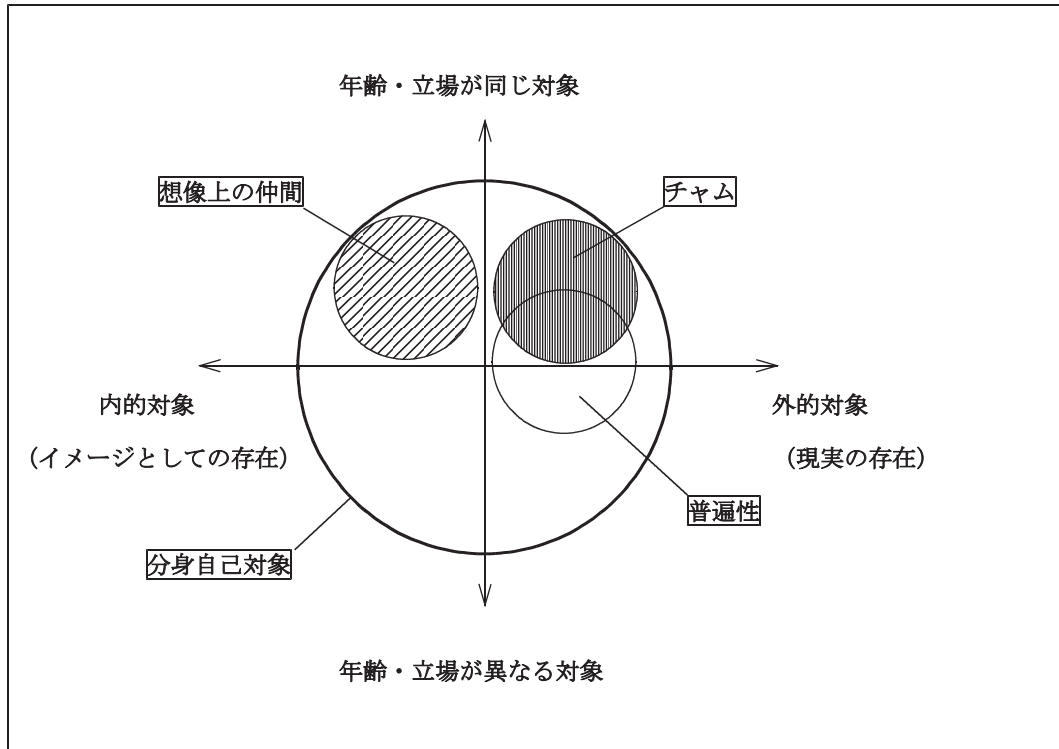


図2 チャム，想像上の仲間，普遍性，分身自己対象の4つの概念の関係

チャム，想像上の仲間，普遍性，分身自己対象の4つの概念の関係について図解を試みる（図2）。横軸は、右に外的対象（現実の存在）、左に内的対象（イメージとしての存在）とする。縦軸は、上に年齢・立場が同じ対象、下に年齢・立場が異なる対象とする。こうした基準で見ると、チャムは、外的対象（現実の存在）、年齢・立場が同じ対象となる。想像上の仲間は、内的対象（イメージとしての存在）、年齢・立場が同じ対象となる。普遍性は、外的対象（現実の存在）、年齢・立場が同じ場合も異なる場合もある。そして、分身自己対象は、外的対象と内的対象の両方を含み、また年齢・立場が同じ場合と異なる場合の両方を含んでいる。分身自己対象の概念は、チャム，想像上の仲間，普遍性の3つの概念を包含している。

(2) シンメトリー経験

チャム，想像上の仲間，普遍性，分身自己対象の概念はいずれも、自己と対象が似ているという意味がある。そこで、これらの概念を包括的かつ本質的に捉えるために、「シンメトリー(symmetry)」という概念を提唱したい（吉井，2014）。シンメトリーとは、自己と対象のあいだに類似性・同質性が存在するという意味である。具体的には、外見，持ち物，興味・関心，性格，家族関係，対人関係，生活経験，価値観などの様々な点において、両者はどこか似ている点が存在するということである。両者は、似ているということに気づいて、それを互いに表明し合って共有することによって、シンメトリー経験が得られる。

深いシンメトリー経験は、人への不信感を癒す力，孤独感を和らげる力がある。不登校の子どもは“私は独りではない”という深いシンメトリー経験を得ることによって、人とのつながりを回復していくのである。深いシンメトリー経験が得られるのは、似ていることを発見してうれしかったり驚いたりした時、あるいは同じ気持ちや経験があることに感動して分かち合いたくなった時である。つまり、深いシンメトリー経験は、「二人は同じ」という心が揺さぶられるような共有経験がある時にこそ得られる。反対に、客観的に観察するような眼差しで詮索すると、似ていることは頭では理解できるが感情を伴った共有経験にはならないので、深いシンメトリー経験は得られにくくなる。つまり、シンメトリーを意識化し過ぎると、孤独感を癒やせるような深いシンメトリー経験は得られにくくなる。

自己と対象の関係の中に没入する姿勢において、あるいは自己と対象の境界がぼやけた融合的な関係において、深いシンメトリー経験が得られる。このような意味において、若い大学院生のナイーブさ，素人性は、深いシンメトリー経験の獲得に大きく役立っている。若い大学院生は、心理臨床経験はほとんどないけれども、子ど

もを少しでも理解し助けになってあげたいという純粋な情熱をもっている。こうした素直な気持ちで子どもたちと交流することによって、「二人は同じ」という心が揺さぶられるような共有経験が得られるのである。

渡辺(2011)は、セラピストの「初心の持つ力」すなわち純朴さ、素直さ、他方で自信のなさ、頼りなさという姿勢が、クライアントを手助けすることにおいて必要不可欠な要素であると指摘した。セラピストの「初心の持つ力」はクライアントに勇気や希望を提供し、自己治癒力を活性化すると述べている。また、白井(2012)は、「初心の持つ力」に関して、「初心者のころは、セラピストとしての自分というものの不確立感が強く、自信もなく、失敗も多い。だからこそ、クライアントとの間で常にセラピストとしての自分の内面に注意を向け、そのつと生きた主体であり続けることが意図してではなく自然とできている面があるのだろう」と述べている。

不登校の訪問臨床においては、次のような出来事があった。子どもは、訪問者が自分と同じような興味・関心をもっていると知って、親しみを感じ、一緒に楽しむことができた。また、子どもは、訪問者にも中学時代にいじめられた経験があることを聞いて、同じような苦しい気持ちを分かってもらえると感じて、心が安らぐとともに訪問者の経験に関心をもつようなことがあった。また、子どもは、訪問者にもひきこもり傾向の不登校の経験があることを聞いて、大変驚くとともに訪問者の経験に関心をもつようなことがあった。

こうした訪問者の自己開示は、いじめ被害や不登校の渦中であって苦しんでいる子どもに希望と勇気を提供してくれる。このような意味で、訪問者自身のいじめ被害や不登校の経験は、子どもの心とつながる“切り札”である。ある訪問者は、数回目の訪問で自己紹介の一つとして自らの不登校経験を話したのだが、子どもには唐突なこととして受け取られ引かれてしまっ、折角の自己開示が全く効果的でなかった。他方、ある訪問者は、子どもが休学するの中途退学するのかを決めなければならない時期になっても何も大事なことを話そうとしない様子を見て、直感的に今だと思っ、自らの不登校経験を打ち明けた。すると、子どもは、今の訪問者の姿からは想像できないと大変驚くとともに、自分の悩みを率直に話してくれたり、訪問者の経験を尋ねたりするようになった。以上のように、訪問のどのような局面で“切り札”を切るのかが重要となる。なお、訪問者は、自らのいじめ被害や不登校の経験について、苦労や挫折があったからこそ成長したという心的外傷後成長として理解していることが大切である。

Herman(1992)は、心的外傷から回復するには、他者との新しい結びつきをつくるという再結合(reconnection)が必要であるとし、それは、「私は一人ではないという発見を以て始まる」と述べている。このことから、ひきこもり傾向の不登校の子どもは、若い大学院生の訪問者との再結合を図ることによって、人とのつながりの回復に向かって行くのである。

おわりに

本論文の目的は、第1に子どもと訪問者の関係性のタイプを明確化すること、第2に事例を通して関係性のタイプの移行過程を示すこと、第3にチャムの関わり意義を示唆することだった。

子どもと訪問者の関係性には<指導的関わり>、<遊びの関わり>、<チャムの関わり>、<相談的関わり>の4タイプがある。これらのタイプは、訪問の経過によって、<指導的関わり>または<遊び的関わり>から始まり、次に<チャムの関わり>が起り、そして<相談的関わり>へと展開する。そして、不登校によって人々とのつながりを喪失した子どもは、訪問者の橋渡しによって外部(相談機関、病院、教育支援センター、学校、等)に行けるようになり、つながりの回復に至る。

こうした移行過程について、<チャムの関わり>から<相談的関わり>へ移行した事例、<チャムの関わり>から<相談的関わり>へ移行し相談機関に来談した事例を提示した。

ひきこもり傾向の不登校の子どもとのつながりの回復のためには、<チャムの関わり>が重要である。そこで、チャムの概念及びチャムの関連概念の検討を通して、<チャムの関わり>の本質はシンメトリー経験であることを示唆した。

文献

- Herman, J.L.(1992). *Trauma and recovery*. 中井久夫(訳)(1999). 心的外傷と回復 みすず書房
 Kohut, H.(1984). *How does analysis cure?* 本城秀次・笠原嘉(監訳), 幸順子・緒賀聡・吉井健治・渡邊ちはる(共訳)(1995). 自己の治癒 みすず書房

- 白井聖子 (2012). 「自分」という感覚をもつことが難しいクライアントに対するセラピストの「自分」のあり方をめぐって— 経験者に及ぼす「初心」の力— 心理臨床学研究, 30 (5), 644-655.
- Sullivan, H.S.(1953). *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鎌幹八郎 (訳) (1990). 精神医学は対人関係論である みすず書房
- Svendsen, M.(1934). *Children's imaginary companions. Achieves Neurology and Psychiatry*, 2, 985-999.
- 田中良仁・吉井健治 (2005). チャム体験と家族凝集性が学校接近感情に及ぼす影響 心理臨床学研究, 23 (1), 98-107.
- 渡辺雄三 (2011). 私説・臨床心理学の方法—いかにクライアントを理解し, 手助けするか— 金剛出版
- Winnicott, D.W.(1965). *The maturational processes and the facilitating environment*. 牛島定信 (訳) (1977). 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社
- Yalom, I.D & Vinogradov, S.(1989). *Concise guide to group psychotherapy*. 川室優 (訳) (1991). グループサイコセラピー—ヤーロムの集団精神療法の手引き— 金剛出版
- 吉井健治 (2003). 不登校におけるチャム形成の研究— 先行研究からの検討— 鳴門教育大学研究紀要, 18, 77-86.
- 吉井健治 (2013). 不登校の訪問臨床— 訪問者との対面が困難な「面壁ケース」の検討— 鳴門教育大学研究紀要, 28, 1-9.
- 吉井健治 (2014). 不登校の訪問臨床— 自己と対象のシンメトリーの経験の意義— めんたる・へるす (徳島県精神保健福祉協会), 63, 15-19.

Relationship between Children and Visitors in Visiting Psychological Support for Children of Non-Attendance at School: The Significance of Chum Relationship

YOSHII Kenji

The purpose of this paper is to clarify the type of relationship between the child and the visitor, to present the transition process of the type of relationship through the case, and to suggest the significance of chum relationship.

There are four types of relationships between children and visitors. These types begin with teaching relationship or playful relationship, progress to chum relationship, and develop into counseling relationship.

Two cases were presented as examples of the transition process from chum relationship to counseling relationship.

Chum relationship is very important in psychological support for non-attendance students. It was suggested that the essence of chum relationship is a symmetry experience through the examination of the concept of chum and related concepts of chum.